

超♡秘密の関係ですっ！

## Step0.プロローグ

昼間は教師なんてお堅そうな仕事をやっているクセに夜になるとハッテン場に通うなんて、自分でもまあ、どうかとは思う。

けれどもアプリだとか出会い系だとかは懲りていた。俺はけっこう顔の良し悪しにはうるさい。ちよっぴり機械に疎い俺には加工された写真とそうでない写真の区別がつかなかった。なんという美青年だと思って現地に赴いて泣きを見てお茶だけして帰ったことは星の数ほどある。

やっぱり生で見て鮮度、やる気、肌ツヤなんかを確かめないと逸品には出会えないということは経験から学んだ。

俺が通っているハッテン場は、ハッテン場とは名ばかりのゲイが集まりやすい居酒屋といった風体で、ナンパが多い以外は酒が美味くて立地も便利な店だった。いつもはここで酒を飲んで、ビビッとくるやつがいなければそそくさと帰る。いたらいたで声をかけて撃沈したり、別のやつに声をかけられたりしてうちに他のやつに取られたりで、うまくいったことはあまりないのだが。

しかしその日は違った。

「ここ、座っても？」

バーカウンターの隣の席、柔らかいテノールの声でそう話しかけられた。振り返れば息をのむほど端正な顔がそこにはあった。茶色い髪が堀の深い顔立ちによく似合っていた。そいつは俺の返事を待たずして俺の隣に堂々と腰かけた。

「僕はナギサ。あなたは？」

その風貌はあまりにも幼い。ふつうに考えれば十七くらいが妥当に見えた。俺は思わずナギサと名乗った青年の肩を抱き、ぼそぼそと耳打ちしてやる。

「お前、未成年だろ。こういうところに興味持つにはちよお〜と早すぎるんじゃないかねえの？」  
「いやだな、よく言われますけど、童顔で若く見えるだけです。十九ですよ」

アルコールは一滴も飲んでません。そう言ってナギサは微笑みながらグラスを傾けた。  
「これでもまだ何か問題が？」と見つめられる。か、顔があまりにもいい。

ナギサのグラスは確かにオレンジジュースが入っていて、顔を近づけてもアルコールの匂いは少しもしなかった。

「それで、あなたの名前を教えてくださいませんか？ これでもあなたをナンパしてるつもりなんだけどな」

「……俺は陽介。顔がキレーなやつは好きだぜ」

そこからの展開は笑ってしまうくらい早かった。

夢のような一夜だった。ナギサとの体の相性は最高で、久々に熱い夜を過ごしてしまった。

まさかあんな顔のきれいな青年が一回り近くでかい俺なんかの体を抱きたがるなんて物好きにもほどがあるとも思ったが、結果的には抜群によかった。

ぐずぐずに蕩けた体内をいつまでも擦ってもらえて、しばらくはオナニーのネタに困らないくらいだ。若いってすげえな、と鼻歌を歌いたくなるような気持ちでこれまで通りの学校生活を送る。

ひとつだけ後悔していることといえば、連絡先を交換しなかったことだ。反応的にナギサの方も俺のことをかなり気に入ってくれていたようだが、あいにく連絡先を聞いたところではぐらかされてしまったのだ。「またいつか」と言ったのにどういふつもりだ。

あまりにも切ないが、そういうこともあるだろう。仕方ないが文字通り一夜の夢、いい思い出として処理しよう。

「先生、ちょっといいですか」

授業のあとの移動時間、うへうへとナギサのことを思い出しながら廊下を歩いていると生徒に声をかけられた。凜とした声。

振り返れば有栖川薫という生徒がいた。この春に二年生になった彼だが、学校内でもかなり目立つ生徒で、その整った容姿のため女子からの人気も高い。

「どうした有栖川」

「この写真を見てください」

「おう」

何気なく見せられたスマホの画面。そこには裸で善がる男の姿が――いやっ俺

「はは」

くそでかい声が廊下に響く。慌てて周りを見渡すが、廊下には俺と有栖川しかいなかった。有栖川に向き直ると、不敵な笑みを浮かべている。

一体いつの写真だ、流出したのか、一体だれが……教師生命どころかまともに社会を生きていける気がしない。顔から血の気が引いていく。楽観的に生きてきた俺もこのときばかりは頭を抱えた。

「な、なんで、お前、それどこで……」

くすつと有栖川は笑う。どこかで見たような目鼻顔立ち。誰がどう見ても整っている顔の顔。

「あんな熱い夜を過ごしたのに忘れちゃったんですか？ 陽介さん」

陽介、そう甘ったるく呼ばれて、ナギサと過ごした夜がフラッシュバックした。この声、そしてこの顔、まさか。まさか、ヅラだったのか。「またいつか」と彼が言った言葉の意味を、俺はようやく理解する。

「ナギサでめえ、やってくれたなあ……」

半ば睨み付けるもどこ吹く風、有栖川は不敵な笑みを浮かべてスマホを大切にそうにポケットに仕舞い込んでいた。

「先日はどうも、陽介先生。」

この写真を悪用されたくないければ、わかりますよね。そう言って有栖川は俺の首筋をくすぐった。少し低い目線から雄っぼい目つきで射抜かれて、途端に体の内側に熱が灯る。なんてったってあんな夜を過ごした相手が目の前にいるんだ。意識するなという方が無理だ。

「……どうすればいいんだ？」

「僕の好きにさせてください。あなたのすべてを」

とりあえず俺は、自分の生活を守るためという大義名分のもとに、この美しい男の奴隷になれるらしい。声が上がらないように細心の注意を払ったが、喉が鳴ってしまふのは抑えられなかった。

## Step 1. 二回目の行為

「完全に騙されたよなあ」

ベッドの上でふてくされてそう呟いた俺に、有栖川……改め、薫はまたですかと嘆息した。バーで会った日のことを俺は未だに根に持っていたのだ。

「だって俺、年齢確認までしたのにあんなシレーっと嘘つきやがって、ひでえよ」

仕事帰りのスーツのままベッドに勝手に寝転んだのに、意外にもベッドの主は特に俺を咎めることはなかった。

「自分の生徒の顔を覚えていなかったあなたが悪い」

今日初めて知ったが驚くべきことに、薫は一人暮らしだった。もしかしたら俺が知らなかったかもしれないが、少なくともそんな話は聞いたことがなかった。

招かれるままに訪れたアパートは小綺麗で、だれかが金を出しているのだろうと容易に想像がつく。しかし他人の生活の気配はなく、彼はほんとうに一人きりでここに暮らしているようだった。

ぎしり、二人分の男の体重を受け止めて軋むスプリングの音をきっかけに、俺も薫も黙り込む。沈黙がいくらか続いて、それから俺の体のそばに薫が腕をついた。また、ぎし、



と音が鳴る。

「これから何するかわかりますか？」

「さあなあ……？ 痛いのはいやだぜ」

そつとシーツの隙間から顔を出して薫を見上げた。何度見ても目をみはるほど美しい顔立ちだ。こんな美しい男に見下ろされると思うだけで心臓が爆音でがなりだす。

「痛いかもしれませんよ」

「っ……」

薫が首筋に唇を落としてきた。ちゅうつと音が立って、やがて鈍い痛みが生まれる。きつく吸われて歯が当たっているのだ。

「痕、残る……ッ」

「なにか問題がありますか？ 隠れますよ、こんなもの」

そのままつうつと首筋を舐め上げられて、ぞくぞくと甘い疼きが背筋から下半身にかけて走ってゆく。

「ふ、っ」

「くすぐりたい？」

というよりむしろ、気持ちいい。そうだ、こいつはこんな風にすつとぼけて、わかりき

ったことを確認してくるのだ。この甘い声で。鼓膜を犯されながら体を端からぐずぐずに溶かされていくんだ。

脇腹から手のひらが這い上がってくる。もう少しで乳首に触れそうだといいところふつと離れたり、ありもしない胸を揉まれたり。じれったくてペニスがどンドン硬くなってしまう。早く気持ちよくならせてくれと期待して、乳首もカッターシャツを押し上げるほどに硬くなってしまった。

「あーあ、形がまるわかりだ」

「っん、く」

ぴしっと軽くつま先で乳首を弾かれて、思わず体をのけぞらせた。布越しにそうして何度か先端を擦られていると、全身が快感に支配されていくのがわかる。指先から足の指一本一本までじんじんと甘く痺れる感覚。

「薫……っじれってえよ……」

薫は黙って俺の乳首をきゅっと軽くつまみ上げた。シャツ越しに摘ままれるとどうしてだかくすぐったさが倍増する感じがする。くうっと甘く鼻を鳴らして、俺は胸を反らせた。

「ペニスがもう硬くなってる。期待してるんですか？」

生徒相手に勃起させちゃあだめですよ。言いながらストラックス越しに膨らんでいるペ

ニスの、ちょうど敏感なくびれの部分をさすられて腰がびくびくと素直に反応を返した。

「は、あ……………っ」

「いやらしい人だな」

すりすり、優しくあやすように、焦らすように繰り返しくびれを親指と人差し指で撫でられる。そのたびにあっあつと短く声が漏れた。ついでに刺激されるたびにカウパーまで漏れているような感覚がする。

「生徒に触られて勃起する変態でごめんなさい…………とか、言ってみます？」

「言うわけねえだろっ！」

「残念だな」

冗談を言うトーンで話しながら、薫はにこりとも笑っていなかった。その手がベルトに伸びる。ついに直で触ってもらえるのだ。

無機質な金属音。バックルが外れてストラックスの前がくつろげられると、それだけでペニスが一回り大きくなる心地がする。早く、早くしてくれ。ぐちゃぐちゃに扱かれてあわよくば射精したい。

そんな俺の期待は簡単に裏切られ、薫はストラックスとボクサーパンツを同時に引きずり下ろしたかと思うと俺の両腿を左右に広げてきた。

カウパーで恥ずかしいほどに濡れている窄まりがその視線のもとにさらされて、いきなりすぎるだろうと文句を言う暇もなく薫がそこに指をあてがってきた。

「またここに僕の……いれてもらいに来たんですよね？」

おいしかったですか、そう問いかける声が少しだけ上ずって、薫もまた興奮していることがわかった。その熱にあてられて、ずくりと疼きが強くなる。薫に抱かれて体の奥底まで快感で漬け込まれた記憶が、フラッシュバックする。

「ふ、うう……ッ」

つつつと優しくその表面を撫でられて、過剰なほどに反応を返してしまう。何度も丹念になぞられるうちにアナルは薫の指を招き入れるようにひくひくと蠢いた。

「物欲しそうですね、なにかあげないと可哀想だ」

「んん………!!」

「なにがいいですか？」

薫はそのテノールの優しい声で俺の耳元に囁く。いれてくれ、お前のが欲しい。ともすれば叫んでしまいそうな言葉をなんとか飲み込んだ。簡単に屈服するみたいでなんとなく癩だった、それだけで意地を張れた俺はかなり偉い。

誰がおねだりなんかするか、という意味を込めて首を横に振った俺に、薫は叱るでもな

く続けて優しく語り掛けた。

「指がいい？」

「ああああ……ッ」

薫の指が体内に潜り込んできた。その中性的ともとられかねない顔立ちとは裏腹に、男らしい手つきでもって直腸内を暴かれてゆく。いつの間にかローションをまとっていた指は痛みを与えることなく、それどころか的確に俺の感じるところを擦りあげながらその根元まで中に入っていた。

「っ、は、あーっ、あっ」

「気に入ったみたいで何よりです」

奥まで収まったあとも指の腹でぐりぐりと前立腺をマッサージするみたいにこねくり回されて、呼吸を荒げながら喘ぐことしかできない。

「気持ちいいですか」

「い、あ、いいっ……！！ 気持ちいいっ……！！」

容赦ない指の動きに腸壁を擦られて、気持ちよすぎて怖いくらいなのに、どうしてだか薫に体を委ねることに安心感すらあった。アナルからじゅぷじゅぷとはしたくない音が鳴っている。お尻の穴気持ちよくなれてよかったですね。あまりにも甘ったるい声にうんうん

と馬鹿みたいに頷きながら足を広げて貪欲に快感を貪った。

「きもちい、あー、やばい、薫う……もっ……！」

腰を浮かせて自分からいいところを薫の指に擦りつけると、生徒に気持ちよくされていくという背徳感も相まって目の前がちかちかした。中の性感帯の一つ一つがペニスを甘く痺れさせる。いきたい。射精したい。薫に中をなでなでされながらちんこも扱かれない。思い切り精液を出したい。

「たのむから、いかせて、なあ薫……ッ」

「そんなにいいんですか？」

「いいって言ってるんだろ……！　ちんこも触ってくれよお……」

先ほどのプライドはどこへやら、薫の首に腕を回して必死のおねだりだ。自分で擦って達することもできるけど、絶対薫にやってもらったほうがいいに決まっている。

「触ってほしい？」

「そ、そこ、あ」

「中だけでいいぶん気持ちよさそうですけど」

つんとペニスの先をつつかれて、達するかと思うほど気持ちよかったのに、薫はそっけないことを言っただけで指を離してしまふ。

「なん、でっ……ひでえよ、薫……いきたい……」

あまりにももどかしくて、くすぶる熱をどうにか冷ましたくて腰を振りたくった。中が熱い、もう擦らないでほしい。だけでもっと欲しい。頭がおかしくなる。ちんこを放置されるのがこんなにつらいなんて初めて体で思い知った。

前立腺のしこりをぐりぐりとおぶされるたびにじんとペニスまで微弱な電流が流れたみたいになる。まるで漏らしているみたいにカウパーが止まることなく先端から漏れ出ている。いた。

「そろそろいいかな」

「あ……っ」

薫の指が体から抜け出ていった。ぐちゅ、音を立てて出て行ったそれは、あれだけやめてほしいと思っていたのに、いざ抜かれてしまうと惜しい。抜くなよ。切なげにひくつくアナルが寂しくてたまらない。疼く窄まりに、あ、あ、と声を抑えきれずにいると、すぐにそこに熱い塊があてがわれた。考えなくたって見なくたってわかる。薫のペニスだ。

「陽介、あなたの中に入れても？」

言葉尻こそ丁寧に伺いを立てているが、俺に答える猶予なんか与える間もなくそれは押し入ってくる。

「は、あうううっ♡♡」

内壁のすべてを丁寧に擦りあげて、前立腺をカリで押し潰されながら最奥まで貫かれた。

薫の亀頭が腹の中で壁にキスしているみたいに腹の中ぜんぶが満たされている感じがする。

「あ、あーっ♡っは、あ♡あ♡」

「あたたかい……陽介……きついです」

「だ、つてあ、これ……すげえ……っでかい、ふ、あああ」

もうこれ以上入らないというくらい奥、腹の中まで深く突き刺さっているのに、腰をぐりぐりを回されると入っちゃだめなところまで入っているような気がしてしまう。おく、おくが、気持ちいい。

腹の奥まで貫かれて息も何もかも苦しくないはずなのに、繰り返しぐりぐりされると脳が快感だととらえてしまうのだ。そうに決まってる。でなきゃこんなの気持ちいいわけがないんだ。

「もう手加減なしです、いいですね」

頬にキスされてるんじゃないかと思うほどすぐそばで薫が吐息交じりにそう言った。

どうやら前回はよほど容赦されていたらしいと悟る。薫のペニスがずぶずぶと音を立てて数回抜き差しされただけで目の前が真っ白になった。



「ッああ……！ふかい……っ♡！おく♡♡♡やだあ、あ♡♡♡」

やだもやめろもまるで通じない。頭までかき回されてるみたいは何も考えられなくなる。気持ちいい。尻の穴が、放置されたままのちんこが、触れた肌の少し低い体温がぜんぶ気持ちいい。

「薫、あ、もっとゆっくり、うう……っ」

「……陽介……っ」

「ゆっくり、あぁっあ♡きもちいい♡」

「無理です、なんて声出してるんですかあなた」

ゆっくりしてほしいのか気持ちいいのかどっちなんですか。底意地悪そうに言った薫の顔があまりにも雄臭くて、腹の奥がきゅんきゅんと焼き付くみたいに熱くなる。

「あ、あーっ♡いく、いきたい、いきそうっ♡」

「中だけでいっちゃうんですか？」

「いけな、い、無理いい♡♡無理だからあ、あッああ♡♡」

尻の穴だけでいくのは無理だからちんこも触って。目で訴えてみたけど、無視されただけだった。腰を鷲掴みにされて、その手が自分のちんこのそばにあるってだけで泣きそうなくらいいきたくてたまらないのに。

口で言うのはなんとなく憚られて、薫の手に自分の手を重ねた。ぎゅっと熱い手のひらで握り返されたので、そのままそっとペニスまで誘導してみる。

「駄目です」

そのまま手首を取られて顔の横のシーツに縫い付けられた。ずっしりと薫の体重が結合部にかかって、また一段と深くまで入ってきたような感じがする。

「ふっぐうッ……♡♡」

「もっとなんか感じて、陽介」

「中、ああ？」

「そう、中」

ゆっくりと薫のペニスが引き抜かれていく。緩やかな動きで奥から抜け出ていくものだから、まるで「いかないで」と引き留めるかのように内壁が甘く締め付けてしまう。これじやまるで俺が薫のちんこを大好きみたいじゃないか。

あと少しで全部抜けてしまうというところで、薫は腰を止めた。入口がびくんびくん、わななく度に口からは意味のない声が出る。

やがて、ぐちゅり、音を立てながら薫のペニスがまた中へと進み始めた。

「あ、あ……っ♡はいつて、る♡中ああ♡あ……っ♡」

入ってくる、中が押し広げられる。ぎゅうぎゅうに締め付けてくる壁を無視して奥に近づいていく。あと少しでしこりにしこった前立腺を潰してもらえるところで薫が腰を微かに引いた。

「そこ……なんでええ……♡♡♡」

「すみません、苦しいのかと」

「くそやろ、っおお♡♡♡あーっ♡♡ああ、はっ♡あ♡そこお♡♡」

また平気で嘘こきやがってと気を抜いて悪態をついた瞬間、薫のちんこがぐりぐりと前立腺をえぐった。しこりをほぐすようにぐりぐり、何度も潰される。抗いようもない快感が下半身から全身を駆け抜けて、ばかみたいに喘ぐことしかできない。

「気持ちいい？」

「うん♡♡♡ん♡♡♡」

よかったですね、お尻の中気持ちいいですね。小さな子どもに言い聞かせるみたいに優しく言われて、なぜだか俺は尻で死ぬほど感じてしまっていることが嬉しくなってる。薫がふうふうと息を荒くしているのも嬉しくて、もっともっとと強請るように薫の腰に足を絡めて自分のほうへと引き寄せる。

「は、はあ、あ♡♡♡」

「奥までほしいですか？」

「ちがっ♡♡♡うう♡♡♡」

違うとは言ってみたものの、体は勝手に薫の体を抱き寄せて奥へとそのペニスを引き込もうとしていた。欲しい、ぶっちゃけ欲しい。欲しいに決まってるけど、こんなにぐずぐずにされて俺は自分の矜持っぽいものにしがみつこうとしていた。

だって初めてだったのだ、こんなに奥まで暴かれて好き勝手突かれて気持ちいいなんて思っただけのは。

「違うんですか、へえ」

ずん、力づくで一番奥まで貫かれる。肺まで貫かれているのかと思うほど苦しいのに、とっくにおかしくなった俺の頭はすべてを快感だと認識して体をよじらせた。

「気持ちよさそうですね」

「ふ、うんツんう……♡♡♡」

いやいやと首を振るけど、ちんこは嬉しそうに先走りをびゅつと断続的に勢いよく漏らしていた。最奥まではめられている状態でぐりぐりと腰を動かされると、壁が擦られて腹の中からじんじりする。足の先から指の先まで薫に支配されているみたいだ。

好きにさせてもらいますね、雄臭く乱れた息を吐きながら薫が言う。体重をかけられた

ままちんこを抜いて、挿して、動きがだんだんと早くなっていくと、もう駄目だった。気持ちいいのが何回も何回も押し寄せてきて理性なんか保ってられたもんじゃない。

「っああ♡あっ♡あっ♡あー♡おく♡くるしいっ♡あっ♡」

「なにが苦しいんですか？」

「んんっ♡♡ちんぼ♡ちんぼくるし♡んおっ♡♡ずぼずぼやだ♡♡♡」

「冗談でしょう、そんなだらしな顔して」

薫の吐息がふうつと口元にかかって、いつの間にか閉じていた瞼をうっすらと開けた。

か、顔がいい。こんなときでも顔がいい。

ピストン運動でうっすらと汗ばんだ薫はいつもよりいくらか髪が乱れていた。その手が俺の顎にあてがわれて、期待でナカがきゅんきゅんとちんこを締め付ける。射精したかと思うほどの熱が全身を駆け抜けた。

キスしたい、そう思ったのに薫は「よだれ垂れてますよ」なんて言って俺の顎をぬぐっただけだった。キスしてくれたら絶対いけたのに、

くそ、くそくそ。射精しそうになっただけでもない。奥を貫かれるたびにいきそうなのにいけなくて、半泣きになりながら薫に懇願する。

「あっ♡ああっ♡薫♡♡ツちんこ、ちんこお♡さわって♡♡さわってくれよ♡」

「いきたい？」

「いきた、あ♡いく♡いきそうだから、はやく、っあ♡」

早く、早くはやく。薫がようやく俺のちんこへと手をあてがった。優しく握られて、「これ？」と甘ったるい声で言われる。

「それ、それそれ……！ しこしこして♡あっ……♡っ♡」

製品版ではフェラチオ（イラマチオ）、尿道ブジー、隠姦シーンがあります。

超♡秘密の関係ですっ！（体験版）

---

発行者 めでる（やんごとなきイイネ！）

無断転載、再配布を禁止します。